

日本ブランド発信事業
「ショートフィルム（短編映画）で日本の魅力を紹介～インド～」

2017 年 3 月

「日本ブランド発信事業」専門家
国際短編映画祭「ショートショートフィルムフェスティバル & アジア」
フェスティバル・ディレクター 東野正剛

日印友好交流年の節目に、インドの首都、ニューデリーにある在インド日本国大使館や、ムンバイにある Y. B. Can Centre にて私がフェスティバル・ディレクターを務める国際短編映画祭、「ショートショートフィルムフェスティバル & アジア（以降、「当映画祭」として表記）」のジャパン部門優秀作品や映画祭がプロデュース指揮をした特別製作作品など、日本の魅力が満載の 4 作品を上映しました。それぞれの作品上映後はその作品の内容について、日本の文化的要素など解説しました。

当映画祭の代表を務める俳優の別所哲也と私が外務省の「日本ブランド発信事業」などで、ショートフィルムを上映しながら、世界各地にて日本文化に興味を持っていただく活動も行っているのは今年で 5 回となります。昨年は、モロッコの首都ラバトやマラケッシュでジャパンショートを上映しました。過去には、サウジアラビアの首都リヤド、オマーンの首都マスカット、イランの首都テヘラン、エジプトの首都カイロ、マレーシアの首都クアラルンプールなど主にイスラム圏の国々においてこの事業を行った経緯があります。

2 月 27 日（月）の夜にムンバイに到着。私にとって初めてのインドへの渡航となります。「インド」と聞くと暑いイメージがありますが、1 月～2 月は最も過ごしやすい時期との事で、日中は日差しが強く暑いですが、朝夕は涼しかったです。翌日、2 月 28 日（火）昼過ぎにインド政府映画局局長の Mr. Manish Desai 氏を訪問しました。この局は映画局庁舎という専門の敷地内にあり、デジタルアーカイブに特化した新庁舎を建設中のほか、3 月後半からオープンするインド映画博物館の最終準備をされていました。ムンバイ国際映画祭(MIFF)を 2 年に一回、主催しているインド政府映画局の Desai 氏との面談では、MIFF の特徴などを教えて頂きました。主にドキュメンタリー作品を紹介しているほか、インドのショートフィルムも上映しているとの事。また、インドでもスマートフォンの活用に注目をしており、映画祭会場だけでなく、今後は VOD(ビデオ・オン・デマンド)を通じて、無料で多くのユーザーにドキュメンタリーやショートフィルムを視聴してもらう機会を増やしていきたいそうです。TV では、メインのコンテンツが俗にいうソープオペラ（メロドラマ）やニュース番組が多く、ドキュメンタリーやショートフィルムを観

る機会はほとんどないそうです。Desai 氏は、「デジタル時代だからこそ、YouTube を中心に、適したメディアにて作品を配信していきます。かつては、それらのメディアに配信するのは著作権観点から控え気味でしたが、今は逆にどんどん上げていった方がいいです。最初 20 人しか視聴しなかったものが、一日で 40 人になれば 100% 視聴者が増えたことになります。紹介したリンクを facebook, や Twitter にてシェアしていくことで、更に情報が拡散するのも利点です。紹介する作品はいずれにも政府が関与しているので非商業目的のものだけになります。」と語られました。



Manish Desai 氏（左）と東野（右）



オープン前のインド映画博物館

「また、政府としては国立のアーカイブ施設や、国立映画学校（Film and Television Institute of India）をプネー市（プネー県）に配置し、1300 本ほどの旧作をデジタル化しました。サタジット・レイ監督のショートフィルムなどもすべてデジタル化されています。」とも話されました。

その晩、第一回目の上映&講演をムンバイ市内にある Y. B. Can Centre にて行いました。火曜日の夕方でしたが、事前に在ムンバイ総領事館からのご案内でお声かけをしていたインドの映画業界（映画祭、監督、プロデューサー）やメディアの方々など大勢の方々に来場頂きました。イベント開始時に、壇上で私が呼ばれ、センター代表から花束を頂いたほか、名誉ゲストの Kiran Shantaram 氏（氏の紹介は後ほど）に歓迎のお言葉を頂きました。私からは挨拶としてこの場を設けて頂いた同センター、そして事業母体である外務省、在インド日本国大使館、在ムンバイ日本国総領事館の皆様にお礼の言葉を伝えたあと、お集まり頂いた皆様にも感謝の意を伝えました。その後、本題のショートフィルムや映画祭について話しをしましたが、まずは、前日に行われた米国アカデミー賞の実写短編部門でノミネートされ、見事、オスカーを受賞した「合唱/Sing」という作品が米国アカデミー賞公認映画祭のひとつである我々 SSFF & ASIA の去年のグランプリ作品で、我々からアカデミー協会に推薦させて頂いた作品だったことを伝えました。観客から歓声とともに大きな拍手を頂きました。我々映画祭にとっても初めての快挙で、説明していた私も興奮していたことを覚えています。

上映ラインアップは、内閣府・復興庁が、「わたしたちのふるさと、10年先の物語―東北を元気にする作文募集」と題されたコンテストの優秀作品を我々SSFF & ASIA が短編映画化した『未来のカケラ』（渡邊世紀監督）、人間国宝の染色家、志村ふくみ氏を題材にした『カラーズ オブ ライフ』（牛島悟郎監督）、そしてエンターテインメント企業と SSFF & ASIA が共同制作したミュージックショートフィルムの『半分ノ世界』（齊藤工監督）と『キャンとスロチャン』（宮崎光代監督）の4作品でした。



上映前の様子



Mr. Kiran Shantaram 氏（左より二人目）

上映前に私から現代における「ショートフィルム（短編映画）」や短編動画コンテンツについて、日本でもますますスマートフォンやパソコン上で視聴する「短い映像」の需要化が進んでいることについて話しました。従来、ショートフィルムは若手映像作家が長編映画の監督を目指す第一ステップとして制作されるパターンが定着していましたが、現在においては必ずしもそうでなく、YouTube 上で気軽に見られるような短い動画コンテンツ制作、また、企業がメッセージ性とエンターテインメント性を融合させたブランド・ショートフィルム制作など、作家性と広告要素が合体するコンテンツ作りで若手映像作家の活躍場が広がっていることについても言及しました。各作品の上映後は、質疑応答も設けられ、地元の観客からは『キャンとスロチャン』の主人公がなぜ、インド人だったのか？、「女性が目元を隠すまで帽子を被っているのはなぜか？」、「ショートフィルムを作る予算はどのくらいなのか？」また、「日本でショートフィルムはどこで見ることができるのか？」など積極的に質問があがりました。また、会場には去年の SSFF & ASIA のアジア・インターナショナル部門において入選をされたムンバイ出身の Pia Shah 監督が会場にかけつけてくれました。急遽、私が壇上で Shah 監督を紹介をし、監督は東京での映画祭、そして日本での体験などを話してくださいました。



積極的に質問する観客



東京での経験を語る Pia Shah 監督

上映後は、ムンバイ総領事館主催による、ムンバイの映画関係者 6 名参加の会食に参加させていただきました。名誉ゲストは、1940 年代に Rajkamal Kalamandir という映画スタジオを建設し、映画監督、プロデューサーとしても活躍された Rajaram Vankudre Shantaram 氏（1990 年 88 歳で没）のご子息の Kiran Shantaram 氏。Kiran 氏は V. Shantaram 基金の理事長の他、Asian Film Foundation の理事長を務めています。Kiran 氏には上映会にも参加頂きました。他にもドキュメンタリー映画作家の Sanskar Desai 氏、Sankar 氏の妹でアニメーション作家の Dhvani Desai 氏、ドキュメンタリー映画作家の Suresh Sharma 氏、長編映画監督の Piyush Panjwani 氏、ショートフィルム監督の Mukesh Chandra 氏が参加された。会食は Kiran 氏を中心に、彼の父の功績、初期のインド映画の歴史について話があり、父との思い出話などを話して頂きました。彼のトレードマークとなっている黄色の帽子も、父が亡くなる前、「お前の頭の上でお前をいつも見守っているから」と授かった、というエピソードも話されました。また、Kiran 氏の父親が、インド政府映画局局長の Manish Desai 氏が話されていた国立のアーカイブ施設や、国立映画学校（Film and Television Institute of India）の基礎を築き上げたとの事でした。また、インド映画の現状について、「現在インドでは毎年、1300～1500 本ほどの長編が制作されている。大作にはハリウッドと同じくらい何十億もかかる映画もあるそうです。劇場の数も多いですが、「インド全体の人口からの比率から考えると劇場の数は多いといえない」そうです。

ショートフィルムの現状としては、「若者が多くのショートフィルムを作るようになったが、政府の映画制作に対する助成金がドキュメンタリー作品に限っているので、フィクション作品はほとんど自主制作とっていい」との事。従って、エンターテインメント志向のテレビでは、それらのドキュメンタリーのショートフィルムも放映されることはなく、「ショートフィルムのマーケットは将来的にはありうる」という意見が多かったです。また、日本の政府がどう映画制作に助成、支援をしているかなどの質問も受けたほか、ドキュメンタリー映画監督である Sanskar Desai 氏からは、「ヒन्दゥー教と仏教には非常に共通点が多いと思う、とコメントがありました。この日印交流年において、日印共同で映画を制作するのはどうだろうか」という提案もいただきま

した。



左より、M. Chandra 氏、S. Desai 氏、K. Shantaram 氏、角田淳一領事（在ムンバイ日本国総領事館）、P. Panjwani 氏、D. Desai 氏、S. Sharma 氏

翌日、3月1日（水）早朝、ムンバイからニューデリーに飛行機で移動しました。午後から、翌日から開催を控えた「女性映画祭（IAWRT）」の理事メンバーの Ms. Archana Kapoor 氏と同映画祭フェスティバル・ディレクターの Subasri Krishnan 氏と面会。今回の映画祭では、全世界 57 カ国から作品のエントリーがあった中、17 作品（17 カ国）のドキュメンタリーやショートフィルム、アニメーション、そしてエクスペリメンタル作品などが紹介される、との事でした。また、映画上映のほか、何人か招聘された女性監督による質疑応答や、カンファレンスなども行われます。コンペティションの映画祭ではなく、上映はすべて無料です。また、上記の 2 名のほか、ジャーナリスト、テレビ、ラジオ、映画監督、プロデューサーなどがメンバーに入っている他の理事メンバーの方々とも挨拶させて頂きました。



フェスティバル・ディレクターの S.Krishnan 氏(左)と理事代表の A.Kapoor 氏 (左から 3 番目)

同映画祭と SSFF & ASIA の今後の連携の可能性として、日本の女性監督のショートフィルムを積極的に同映画祭に紹介すること。また、全世界に 12 チャプター（12 の女性映画祭）と連携しているとの事で、まだつながりの無い日本で、女性映画祭を行っている団体なども紹介することを話しました。今後は、この映画祭と定期的に情報交換することで、先述した日本の女性監督をインドで紹介できるような人物交流を促進するとともに、女性映画による日本の映画コンテンツも積極的にインドで上映できるよう、考えていきたいと思います。

夕方 6 時半から国際交流基金ニューデリー日本文化センターにて、2 回目の日本のショートフィルムの上映会が行われました。ここでも日本文化に興味をお持ちの現地の方々にご参加頂きました。上映前は、在インド日本国大使館次席公使の菊田豊氏よりご挨拶を頂きました。

上映後の質疑応答のコーナーでは、『半分ノ世界』（齊藤工監督）が、インド映画「The Lunchbox/（邦題）巡り合わせのお弁当」のストーリーと良く似ている、というコメントもありました。また、SSFF & ASIA の歴史上、過去にどのくらいインドのショートフィルムが上映されたのか、なども聞かれました。「日本とインドのショートフィルムの作品の内容の傾向、違いは何？」という質問に対して私は「インドの作品に多いのは、貧困の中でも生き抜いていくという希望を描く作品が多いのに対して、日本の若手作家の作品は学園の恋愛ものや、コメディ的な作品が多い」と答えました。映画上映が終わった後も、上映に来られた大学生に囲まれ、映画の感想のほか、「日本語を勉強したい」との事で、日本語を学ぶにはどうしたらいいか、などの質問も受け、日本に

関して興味を持つ若者が多い印象を受けました。



国際国流基金ニューデリー日本文化センター受付

上映合間に作品解説

3月2日（木）は、午前中、Indo-Asian News Service のインタビューを大使公邸で受けました。質問としては、「日本ではどこでショートフィルムが見られるか」、「ボリウッド映画は好きか？」や「インドへは初めて来られたのか？インドの印象は」などを聞かれました。

その後、平松賢司駐インド日本国大使主催による昼食会に参加しました。参加者は私のほか、現地の日系企業でご活躍される4名も招待されました。

平松大使からは、日本のショートフィルムのトレンドについて、質問を受けたほか、各、日系企業で仕事される方々にもそれぞれの分野におけるインドでの状況などについて意見交換が行われました。ある企業の方からは、インド人映画俳優が日系企業のブランド・アンバサダーを務める重要性について話がありました。私からは、映画祭に集まる世界からのショートフィルムの分布を分析すると、応募の数が多いトップ5の国は、世界において観光立国でも同じく上位に入っている国であった、と申し上げました。映像産業が盛んな国は、海外においても映画を通じて自国のプロモーションにつながっている、ということになります。また、現在、日本人俳優がキャスティング(起用)されたインド映画が公開中であることなどについても、お話いただきました。更に、平松大使からは、インド映画は数だけでなく、劇場のクオリティも素晴らしいというお話もありました。デリー市内にある DIRECTOR' S CUT という劇場の椅子は、ファーストクラスのようになっていて、座席から「寿司」も注文もできるそうです。

昼食会終了後は、公邸のお庭で記念撮影。後方、右側の後ろに写っている大きな木は約50年前に現在の天皇皇后両陛下が植樹された木ということで、私も含め、その大きさと時の流れを感じました。



平松大使（右より4番目）と日系企業関係者等

午後になり、インドの有力紙「The Tribune」からメディア・インタビューを受けました。過去のインタビューの内容と被る部分もありますが、映画祭とインドのつながり（過去の）や、ショートフィルムの映画祭としての役割、重要性についてなども聞かれました。また、SSFF & ASIA内で紹介される作品のテーマは、国際的なものが多いのか、国内的な話が多いのかも聞かれました。例えば、去年から今年にかけて応募がある作品の中には戦争や難民がテーマとなっているものが多く、これは世相に比例した結果です。過去にも2001年に米国で起こった同時多発テロの翌年、「テロ」に関する作品が多く集まりました。

ただ、作品が取り扱う内容とテーマは違ってきます。戦争や難民の作品は、国際的、もしくは国内的な問題にしる、出来が良い作品は、すべて普遍的な「ヒューマニズム」がうまく描かれています。そのヒューマニズムとは「博愛」であったり「希望」であったりと、宗教や人種を超えたヒューマン・バリューです。なので、SSFF & ASIAでも賞に輝いたインドのショートフィルムにはそうした要素が多くあり、日本でも評価を受けました。

また、「インド映画は好きか？」の答えには、やはりサタジット・レイ監督の「アプ3部作（日本では、長編ドラマシリーズ「大地のうた」「大河のうた」「大樹のうた」として知られる）」と「チャルラータ」そして「ビッグ・シティ（Mahanagar）」をあげました。特に後半の2作品は50年～60年代のインドにおいて、フェミニズムがテーマとなっている重要な作品といえます。

その後、映画評論家のMs. Aruna Vasudev氏と懇談しました。氏は、映画評論の他、Buddha Film Festival（仏教映画祭）を立ち上げて運営されているそうです。今年、4回目を迎える開催は、4

月 7 日から 11 日との事でした。今回、大使公邸でも上映する 4 作品のひとつ、「Color of Life」にも染色家の志村さんのお話にも仏教につながる話があったりと、引き続き、日本から仏教やその思想が要素として含まれる映画などを紹介していくことを話しました。



Tribune からのインタビュー

Ms. Aruna Vasudev 氏との面会

そして、6 時半からは大使公邸で 3 回目の上映を行いました。上映前には、平松賢司 駐インド日本国大使よりご挨拶を頂きました。私からは上映前に、SSFF & ASIA の簡単な歴史と、「米国アカデミー賞公認映画祭」の意味などを解説させて頂きました。丁度、SSFF & ASIA 2016(去年)の映画祭でグランプリを獲得し、SSFF & ASIA から米国アカデミー賞の実写短編映画部門に推薦をした「SING(合唱)」というハンガリーの作品が 27 日(月)のアカデミー賞授賞式において、見事、オスカーを受賞した快挙を話させて頂きました。会場からも皆様からの拍手でお祝いいただきました。その後、『未来のカケラ』(渡邊世紀監督)の企画説明(内閣府・復興庁が、「わたしたちのふるさと、10 年先の物語ー東北を元気にする作文募集」と題されたコンテストの優秀作品を SSFF & ASIA が短編映画化など)をして、人間国宝の染色家、志村ふくみ氏を題材にした『カラース オブ ライフ』(牛島悟郎監督)と続けて上映しました。

最初の 2 作品の上映後は、エンターテインメント企業と SSFF & ASIA が共同制作したミュージックショートフィルムの『キャンとスロチャン』(宮崎光代監督)と『半分ノ世界』(齊藤工監督)を上映。『キャンとスロチャン』はインド人が主人公のコメディ映画ともあり、劇中、観客からも笑いが起こり、拍手がおこりました。次の『半分ノ世界』に関しては、作品を見てもらう前に簡単ではありますが、日本の夜間学校について説明をしてから観ていただきました。それで話が分かりやすくなったのか、こちらでも上映が終了すると拍手が聞こえてきました。



上映中、上映後の様子

上映が終わると私から、改めてショートフィルムが今後、ますます、現代社会においていろんな分野で活用されていることや、その重要性について話をして会を終了させて頂きました。

上映終了後、同大使公邸でお越し頂いたゲストの為にレセプションが開かれ、私もメディアのインタビューや現地の映画人・関係者と交流ができました。

短い滞在ではありましたが、当映画祭もなかなか出会う機会が無かったムンバイやニューデリーの映画関係者とのネットワークが広がり、来年以降、更にインドからのショートフィルム公募数が増える成果を生み出したいと思います。そして今回の事業をきっかけに益々、インド映像業界と当映画祭の文化交流を行い、「日本ブランド」への理解を更に高めていきたいと思っています。最後になりましたが、日本外務省と現地在外公館の皆様のご協力を心から感謝いたします。

【参考リンク】

外務省「日本ブランド発信事業」 http://www.mofa.go.jp/mofaj/p_pd/pds/page22_001100.html

ショートショートフィルムフェスティバル&アジア <http://www.shortshorts.org/>